

表象民俗文化論の可能性について

「写真集安倍晴明伝説」の出版を契機として

Possibility of a View of Represented Folk Culture on the Publication of
“Legend of Abeno Seimei in Pictures” (1995)

高原豊明

① 安倍晴明伝説の表象

② 表象民俗文化論

結論

【論文要旨】

拙著「写真集安倍晴明伝説」(1995)の出版を契機として、著者の予想しなかった様々な購買動機をもった購買者層に支えられると共に、単なる貨幣と商品の交換を越えた、写真集というメディアを通じた、作者と読者のコミュニケーションの成立があった。私の収集した315件の晴明伝説のデータにより、晴明伝説は、普遍的性格を有する伝説であり、さらに、様々な宗教宗派の人々により伝播・伝承され、あらゆるクラスの人々により伝承されたことが立証された。以上のように精密に晴明伝説の全国分布を示し、さらにその個々の伝説の内容を詳細に検討することで、晴明にまつわる史実と伝説のエクリチュールと、現地の晴明伝説の相関関係の有無が明らかとなり、伝承者の系譜を歴史的に辿り、伝播者を推定することで、晴明伝説の発生—伝播—伝承、言い換えれば創造—伝達—受容のプロセスとその社会関係が推定可能となるわけだが、まさに、そのプロセスと社会関係の解明こそ、表象民俗文化論の目指すものであると第1章で論じた。

第2章ではその表象民俗文化論について分析した。渡辺守章や蓮實重彦が立ち上げた表象文化論を再検討すると共に、そのまま、民俗文化に、その理論をあてはめる前に、「表象」・「民俗」・「文化」の意味を考えることで、この三つをつなぐことの可能性をさぐった。

以上のような1,2章の議論を踏まえた上で、過去に別の作り手と受け手のいた民俗文化をその関係まで含めていかに現代に表象しようとしたかを論ずること、その表象を通して民俗文化は、いかに受けとられたかを論ずること、垂直・水平のベクトルではなく、45°のベクトルでシーソーゲームのようにコミュニケーションをとり続けること、現代社会と相関した視点を持ち、その社会的制約による表象不可能性を論ずること、そこに表象民俗文化論の可能性がある、と結論づけた。

キーワード：表象、民俗、文化、出版、写真